
LOVE SICK

立花透琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE SICK

【Zコード】

Z8504L

【作者名】

立花透琉

【あらすじ】

高校の時にキスを交わした二人。

しかし、友人としての関係を保ちながら大学へと進んだ。ある日、その関係が崩れようとしていた…

- 1 - (前書き)

大学生のボーカライズラブになっています
苦手な方は閲覧注意です

想つても

想つても

きつと貴方は振り向かないだらうけさ

それでも、近くにいてくれるだけで良いなんて…

しみつたれたラブソングみたいで笑ってしまう

だけど本心

キミがいてくれれば、それだけで満足

* * * * *

「明日、出席票出しといてくんね?」

同居人の鴨井祐也かもい すけやに言われたのは、バイトから帰宅してすぐ。

『ただいま』の返事も無く、これが第一声。

「ミヤ、明日は一限行くだろ?」

「行くつもりだけど…。祐也は？」

「俺、明日は行けない。多分帰らないから、よろしく」

「はあ？」

思わず変な声を上げたのは、こいつが帰ってきたのは今さつきの事だから…

俺 田之上雅は、バイトして祐也が帰宅したのがいつだかも知らない。

ただ、昨夜もいなかつたし朝もいなかつた。

大学から戻ってきて、バイトへ行く間にも帰つてこなかつた。

つまり、俺がバイト中に帰宅したことになる。

それなのに…

「また女のとこかよ」

「ま…ね」

「今度は…誰？」

「どつかの女子大の子。シゲからの紹介」

つまりなそうにタバコを加える祐也に、俺は派手にため息をついた。

いつもこんな感じ…

誰かしら女がいて…それは別に誰でも良くて…

実際、ここはかつここと黙つ

187の長身に、流行りを外さない格好

茶髪に見えるその長めの髪は、脱色したわけじゃなく地毛らしい。

俺には無いものを持つアイツ…

成績も悪くない

（良いわけではないけれど…）

スポーツも出来る。

高校で出会ったここは、いつでも立っていた。

だから、ここはの女関係も派手だった。

「さりげがおきな」のが不思議なくらい…

「紹介されたからって、すぐに朝帰りかよ」

高1からつるんでるから、大学二年の今、5年のつきあいになるが
祐也の女関係にはじつもついていけない

「もつ少し考えれば？」

「考えたって結局は一緒だらへやるもんはやるし…

朝まで付き合つて事は女だってイヤじやないんだらつ…」

「あつそ…」

俺は半分呆れながら、バイト帰りに寄つたコンビニの弁当を冷蔵庫に放り込む。

その背後から、祐也が俺の体を抱きしめてきた。

「…ア…」

小さく耳元で囁く声

俺はゆきへじ振り向く。

168の俺では、祐也を見上げる形になつてしまつ

祐也のブラウンの瞳に映る俺の姿は、祐也とは逆の冴えないスタイル

なんだかそれだけで凹む

「ミヤ…」

もう一度、祐也が俺を呼ぶ

そして近づく顔

(やつぱ…かつこいんだよなあ)

俺はほんやりと腰こながり、胸に軽く触れてくる祐也のそれを感じた。

- 1 - (後書き)

もつべしお付を合ご頂けると嬉しいです

高1から気付けばよく一緒にいた。
一緒にバカやって、一緒に怒られた。

最初にキスしたのは高2の秋

きつかけは忘れたけど、遊びのようなキスに、俺はあいつへの気持ちに気付いた

一緒にいるのは楽しかったけど、それは友人だからだと思っていた。

だからキスした時、自分でも驚くほどあいつを意識した。

俺は、祐也が…好きだつたんだ…

だけど、一度も気持ちを打ち明けた事はない。
祐也の女関係は高校から変わらないし、
気持ちを打ち明けて、離れていく位なら友人として続けていきたか
つたから…

それでも…時々、遊びのよろこびにキスをする

ただ、それだけで嬉しかった

大学が同じだと知ったのは、卒業も間際

『俺や～ミヤと同じ大学に行くことになつた』
卒業を祝う会と称した食事会で、隣に座つた祐也からの言葉

『え？ 同じ大学受けてたのか？』

『いくつか受けていたんだけどさ。で、お前と同じところ受かつたし

…』

大学に行けば、離れ離れになるだらつと覚悟していた俺にしたら、嬉しい出来事。

しかし、顔には出さず

『じゃあ、4月からもよろしくな』
と返した。

だけど、あいつは更に俺の気持ちを舞い上げた。

『でさ、家…・・出ようと思つてんだよね』

『ふうん、いいじゃん。一人暮らしなら、女呼び放題だしな』

『別に女呼びたい訳じゃねえけど…。いい加減、親がつるせえのよ』
『まあな～。うちも同じもんだよ』

『じゃあ、一緒に住もうぜ。家賃折半すりゃそれなりのところに住めるだろ？』

お前となり気兼ねいらねえしさ。食事とか掃除とかは交代にすりやいいだろ？』

そう提案してきた祐也に俺は当然OKした。

ただ、時々帰らない夜や、女と歩く姿を校内で見たりすると、ひどく落ち込むのだけれど…

一緒に住んでいる分、今まで見えなかつた私生活が見えてくる。部屋の中で鳴る携帯。

メールの時もあるし、電話の時もある。

電話の時は、向こうも気を使うのだろう。

リビングから出で、自室へ行く。

しかし…3DKの学生をターゲットにした安アパート。

自室にこもったからと言つて、防音完備なわけではない。

時折聞こえる会話の端々が、凄く楽しそうで…居た堪れない気持ちになる。

次の日…

「雅！」「

「シゲ…」

一限、祐也の言つとおり出席票を提出して、俺は授業を終えた足で食堂へ向かう。

その途中、友人のシゲ・・・松山一茂に声をかけられた。

「祐也は？」

「彼女のとこ」

「ああ、俺が紹介した子？」

「そう」

シゲは大学からの友人

地方から出てきたから、こっちで一人暮らしをしている

「美人だろ」

「俺は見てないよ」

「写メ送つたんだけどな。なんでもミスなんとかつてやつみたいだ
ぜ」

「…シゲ…おまえもよく知り合つたな。そんなレベル高いの」

こつちに知り合いがないシゲは、サークルのコンパに進んで参加
していた。

恐らくそういうことで知り合つたのだろう

「レベル高いの狙つてるからな。おまえにも誰か紹介してやる
か？」

まるでどつかの親戚のおばちゃんかのように
知り合つた女の子を友人に紹介しているらしい。

(…シゲ…良い人で終わりそうなタイプだよな)

本人が聞いたら怒るだろうと、口には出さないが

「うやつで橋渡しをしている姿しか見ないのもビックリと思つ。

「俺はいいよ。彼女がめちゃくちゃ欲しいわけじゃないし…」「でも、Hンジヨイ！ キヤンパスマーフ！ って言つたら彼女じゅねえ？」

「別に？ バイトも楽しいし…」

実際、高校の時も何人か付き合つた事があった。祐也への気持ちを確信してからも、その気持ちを振り切つて、女の子と遊んだりもしたが… 結局無駄だった。

相手だつてバカじゃない。

祐也みたいにビジュアルが良ければ「気持ちが無くてもいいわ」くらい言えるだろうが

そんなビジュアルを持ち合わせていない俺が相手ならば気持ちが伴わなければ、相手だつて離れていく。

それを頑張つて繋ぎとめるほど、俺も相手に気持ちがあるわけじゃない…。

「雅もひー、顔は悪くないと思つんだよな」

「…」顔はつてなんだよ？」「…

「いや、ほり…なんつの？ ジャーー系つてこの？ 可愛い顔立ちではあると思つよ」

「男が男に可愛いくって言われても嬉しくないし、そんなフォローはいらない」

伊達に生まれてからずっと、この顔と付き合つてきたわけじゃない。自分の容姿など自覚していない。

「マジで…悪くなぁって。たださー、ほら、祐也が田立つからなあ」

「…俺が霞むつて?」

「そつそつ。祐也つてタッパあるし迫力あるしなあ」

「だな」

「だから、隣にいると霞んじゃつだよね。俺もお前も」

ケラケラと笑いながら話すシゲは、なんだか楽しそうだ。話している内容は、結構シユールだと思つけど…。

二人は食堂に着く。

皆2限の授業に向かっているのだらう。

食堂はガラガラだった。

俺は2限を取つていないし、シゲも本来なら今日は授業が無いはずなのだが

課題をやると言つて大学に足を運んだらしい。

食堂の隅陣取ると、缶コーヒー片手にのんびりタバコに火をつける。ゆうく上つていぐ煙に田をやる。

「なあ、雅い」

ふと、シゲが口を開く。

「ん?」

「今日、バイト?」

「あ~…うん。10時からラストまでな。なんで?」

俺のバイト先は居酒屋のチーン店。

昼はレストランとして開店しているので、授業が無い日は日中もバイトに入っている。

それでも出来るだけ夜のシフトを入れるのは、給料が良いから。

いくら家賃折半・光熱費も折半といったところで都内アパートの家賃を支払うにはそれなりに稼がないといけない。

実家からの仕送りも断つてるので、完全に自分のお金でせりくじをしている。

その為、祐也も夜でも働けるように24時間のレンタルビデオショップでバイトをしている。

夜でも動けるのは学生の特権だろう。

「8時くらいに店行く予定だからね」

「ふうん。じゃあ店長に言つておいてやるよ。何かサービスしてくれんだる」

「サンキュー助かるわ~」

時々、友人がこうやってバイト先に飲みに来る。

事前に店に言つておけば、時折サービスしてくれるのだ。

「あ、たぶん祐也も来るぜ」

「祐也も? あいつデートだら?」

「そうそう。その彼女と 彼女が友達連れてくるっていうからね~」

「あ~…コンパすんのね」

俺はゆっくりとタバコの煙を吐きながら呟く。

正直、見たくは無い。

祐也に甘える女性。

付き合っているんだから、それなりにイチャついたりもするんだろう。

う。

誰がそんな光景を見たいものか…

「雅也祐也の彼女、見てみろよ? 美人だぜ。目の保養!」

「…ん…忙しくなかつたらな」

なんて、言い訳。

できる事なら見たくない。

何度もそういう光景は見たことがあるが(どれも違う女なのだけど)
やはり見た後は気分が悪い。

今日のバイトに少々気を重くしたせいか、いつもよりタバコの味が
苦い気がした。

- 3 - (前書き)

間隔があいてしまいました。
話の流れにはそんなに大きな変化はないですね

「お疲れさま～っす」

俺ははいつものように、従業員入り口からバックルームへ入る。

すでに同じシフトのバイトが準備を始めている。

「ねえ、鴨井くんたち来てるよ～」

制服を着た雪下早百合が俺の元へ駆けて来る。

「ああ、飲み会って言ってたな」

「そ、うなんだ～。なんだか美人な子連れてたよ。友達もきれいなの

つ

早百合は「口」口と笑いながら話す。

長い栗色の髪を結い上げ、きれいなメイクをしている早百合もそれなりに美人の部類に入る。

「じざつぱりした性格のせいいか、息が合い

同じシフトに入ると、仕事もやりやすかつた。

「シゲも来てるだろ？」

「うん、来てるよ」

祐也やシゲは、結構店を利用するせいいか、バイト仲間の間でも知つた顔だった。

「店長に話しておいたんだけど、つまみあたりサービスしておいて「了解。適当に出しておくれ。」

そう言って、先に早百合は仕事に出る。
俺も着替えを済ませ、フロアに向かった。

（見たくないな…）

そうは思つけれど、やはり顔を出さないわけにはいかない。

8時からと書つていたので、10時を回つた今はすでに解散の方向に向かつているのだろうか…

（仕方ないな）

意を決する。

何度も、同じ光景は見てきた。

今までだつて平氣だつたんだから、今回だつて平氣。

自分にそつ言い聞かせながら、祐也たちがいるテーブルの方へ向かう。

遠くからでも、祐也たちがいる場所が分かる。

自然と目が祐也を見つける。
そんな自分が情けない。

「ども」

小さく会釈しながら、テーブルへ近づく。

メンバーは6人。

見事なまでに男3、女3の合コン状態。

一番奥に座っている女性が祐也の現彼女だろう。

隣に座る祐也にもたれる顔は、少し赤い。

いやらしくない金のロングに、軽くウェーブがかかっている。お酒のせいだとロンとしたその田つきは、少し潤んでいて男ならノックアウトされてしまう。

細い腕、長い指先。きれいにアートされたネイル。

イヤといつほど、女を見せ付けられる。

そしてその女性に肩を貸している祐也はタバコに口をつけてくる。

祐也の隣にはシゲ。

こっちも完全にお酒が入っている。

シゲの向かいには、祐也の彼女の友達。

ショートヘアの似合づ、さつぱりめの女性。

その隣には、シゲの友人。

何度も学内で会った事がある。

そして、一番奥にはもう一人女性。

どこかのお嬢様ではないだろうか?と思いつほどのおとなしい雰囲気。

「お~、みやびい~」

手を上げるシゲのろれつはかなり怪しい。

「こいつ、雅つていうの。ここバイト。で、さつきサービスで揚げ物類くれたつしょ? こいつのおかげ~」

さも、自分の手柄だと言わんばかりにシゲが自慢げに話す。

「わあ、ありがとう！」

ショートカットの女性が笑顔で言つ。ふと、その声に反応したかのよつて、祐也に頭を預けていた女性が顔を上げた。

「…みやび…くん？」

「はい？」

「あなたが…ミヤくんなの？」

いきなり名前を呼ばれ、困惑した。

「ミヤって…ああ、もしかして祐也が何か言いました？」

ミヤと呼ぶのは祐也しかいない。

高校時代の友人です、ひも、ミヤとは呼ばないから。

「ふふ、正解。祐也と一緒に住んでるんでしょ？」

「ええ…まあ…」

楽しそうに笑う彼女に、雅は祐也に鋭い視線を投げる。

(一体、何を話したんだよ！)

しかし、その視線に肩をひょいとあげただけで、祐也は何も言わない。

「大丈夫よ。変な話を聞いたわけじゃないから。祐也の部屋に行きたって言つたら
”ミヤがいるからダメだ”って言われちゃつただけ。」

「はあ……」

なんと答えればいいのか分からない。

「あ～…と、じゃあ俺、仕事戻りますんで。」「わっくわっく」と、俺はテーブルを後についた。

なんだかドツと疲れた気分だった。

今夜の店は、やたらと混んでいた。

オーダーがひっきりなしに入り、休む暇など無いほど動く。

閉店2時のこの店で、ようやく落着きが見え始めたのは1時半過
る…

この頃になると、既手持ちの酒だけで会話しているし
大半は酔つて騒いでるだけ。

(なんか…疲れた…)

俺は店の『M』を纏め、外の『M』置き場に運ぶ。
賑やかな店内から、夜中の静けさに移動しただけで体も精神的にも
ドツと疲れを感じた。

(早く帰つて寝てえ…)

ぼんやりと思いつながら、肩を回す。

すると、いきなり背後からその肩を掴まれる。

「うわっ…！」

驚いて振り向くと、そこには祐也が立っていた。

「ゆう……や……驚いた」「

「わり」

「なんだよ。まだ飲んでたのか？」

予約時間から、かれこれ五時間くらいはいることになる。
忙しくてフロアを見ることがあまり無かつたけど、とうとう帰つたものだと思い込んでいた。

「なんだか盛り上がりがつてな。シゲなんて、まだ何か語つてる」

「あはは～。そりや「愁傷様」で、お前は外で何してんの？彼女は？もしかして、2人で抜けようつて？」

俺は周囲を見渡す

しかし、路地裏のこんなところに彼女連れてくる方がおかしいってもんか。

「美結はまだ店。寝てるよ」

「みゆ？つて…彼女の名前なんだ」

聞き慣れない名前に、それが彼女の事だと気付くのに少し時間がかかる。

「紹介してなかつたつけ？」

「いちいちおまえの彼女を紹介されてたら、名前覚えきれないよ」

「そうか？」

「そう。で、その美結ちゃんは寝かしたままで良いのか？あんな美人、目を離したらシゲあたりが危ないんじやね？」

「別に… そうなつたらそうで、いいんじやねえの？」
祐也は苦笑しながら、タバコに火をつける。

相変わらず執着心が無い

昔から変わらない。

別れた彼女の事を一度も追うような真似もしなかつたし後を引くこともしなかつた。

自分から告白した事もないだろうから、本気の恋愛はしてことが無いのかもしれない。

「タバコ、吸いにきたのか？」

「タバコと外の空気」

祐也の言葉に、なるほどと思つ

いつまでも籠もつてゐるのもイヤだらつ

「もうすぐ閉店だから、起きておけよ？」

「ああ」

「じゃ、俺は店に戻るから」

そう言って軽く祐也の肩を叩くと、再び店への扉に手をかけた。

その時…

「ミミ」

「ん？」

「キスして」

祐也の言葉に、俺は振り返る

壁にもたれたまま、タバコをくわえ、一いつひを見つめる祐也

今まで、何度もキスはしたけれど
こいつで言葉に出して求められることが無かった。

「何言つてんだよ」

「キス。いつもしてんだろう？」

れすがにこいつ言わると何も言えない

「あ……そつだけどや。どつせ美結ちやんとすんだろ？俺としなくて
もこいじやん」

そ、う……

どつせ、この後こいつは美結ちやんと過（）ぐ

帰らないうつて言つてたんだから、それなりの事はするんだろう
キスしたいなら、美結ちゃんにいくらでもすればいい

「つとこ……酔つ払は」

「じゃあ、帰る。美結んこいつは行かねー。それならキスするか？」

「……はあ？」

「今日ラストまでだろ？終わつまで待つから、一緒に帰るつぜ」

「こいつは……何を言つてるんだ？」

時々、突拍子もない事を言つからつていけない
気紛れにも程がある

「だから、しろよ」

そう言つて近付いてくる祐也の顔を見上げた。

全く…ワガママ過ぎるだろ

気分屋で、その場の感情だけで物事を決める
先のことなんか考えてやしない

- - - - ガキかよ…

おもひやや欲しがるガキと同じだ

「ミヤ、聞いているのか？」

「聞ってるよ」

「じゃ、しろよ」

「…駄々こねかよ」

「ひるせ」

「仕方ねえな」

そう言つて笑うと、俺は軽くキスをする。

その瞬間…彼女のものだらうと思われる香りが鼻を突いた

仕事が上がれたのは3時近かつた。

バイトの階で店を出る。

「あれ？ 祐也くん！」

声を上げたのは早百合だった。

「彼女は？ 皆帰っちゃったの？」

早百合が駆け寄ると、祐也は寄りかかっていたガードレールから体を上げた。

「よ、早百合ちゃん。俺はミヤ待ちしてんだ」

「そうなんだ〜」

俺は2人が談笑してるとこに近寄る。

俺に気づいた祐也は「おつかれ」と片手をあげて言った。

「おつかれ。しかし… まじ、ほんとに待ってたのかよ

「まあな」

「じゃあ帰るか。階、おつかれ」

俺は振り返り、バイト仲間に手を振る。

向こうも「おつかれ」、「じゃあな」と口々に挨拶する。

「じゃあ私も行くね、お疲れ様あ」

早百合も駆け足でバイト仲間に混じって帰つて行つた。

「さて、行くか

残された祐也は自宅方向へ歩き出す。

俺もそれに続いた。

「彼女、どうした？怒ってなかつたのか？」

さすがに、何て言つて彼女を振り切つたのか気になり、祐也の背に

問い合わせた。

「あ～、あのまま寝てたからタクシー乗せて帰した。真明が送つて

いくつて」

真明^{まさあき}とは、シゲの友人だらう。

俺の知らない名前が、こうやつていつも出でくる。

「ふうん。その真明くんが彼女狙つてたらどうすんの？」

「別に。それに狙つてないと思うし…」

「じゃあ、別の子狙いか。そりやまあ…真明くんも『愁傷様だな』

自分の用當ての子を送れず、祐也の彼女を送る事にならひつとは…

真明が誰狙いかは知らないが、なんだかかわいそうではある。

「やういや祐也、明日バイトだろ？」

「おう」

「悪いんだけど、上がりついでに何かロバロでも借りてきて。明後日、休みだから見ようと思つてさ」

祐也のバイト先はレンタルビデオ店。
新作も真つ先に借りてきて貰えるから重宝している。

「何系？AV？」

「なんでAVだよ。AVじゃなくて…。適当に。コメティあたりで

「りょーかい」

他愛のない話をじつると、あつといつ間にアパートに着く。

なんだか、じうじて祐也とともに顔を合わせるのは久しぶりかも

しない。

それだけ連日すれ違ひの日々。
だけど、きっと祐也はそれすら気付いてない。

「祐也、風呂入っちゃまえよ

俺はテレビのスイッチを入れながら祐也に話しかける。
祐也は荷物を放り、俺に向き直った。

「ミヤ、先に入れば?」

「俺は後で良い。先に祐也入れよ。お前の匂い、気持ち悪い
「…あんな、何それ」

俺の言葉に怪訝そうに祐也が咳く。
その声に俺は苦笑した。

「お前のタバコの匂いと、彼女の香水…相性悪い。何か妙な匂いになつてゐるからひとつこと」

ウソではない…

ウソではないが…本心は彼女の香りを漂わせてる事に気分が悪い。
なぜなら祐也からするタバコの香りは…嫌いではないからだ。

「部屋にその匂い付ぐの勘弁」

「わかんねえな…」

祐也は自分の服を嗅いでみたりしている。

「自分の匂いなんてわからねえだろ。いいから…」

早く行け……と言おつとした瞬間……

俺はその嫌な匂いに包まれた。

いつものように、柔らかく抱きしめるのとは違つ

祐也は力任せに俺を抱き寄せ、そのままキスをしてくる。

高校から続く、軽いものとも違つ、奪つような、痛々しい口付け

「ちゅ……ちゅ……ちゅ……」

祐也の体重を支えきれず、俺は床へ倒れそうになる。

「ちゅ……ちゅ……ちゅ……」

口内に忍び込んでくる舌

角度を変え、何度もそれは俺の口の中に滑り込んでくる。

女と付き合つた時ですら、こんなに激しく求められた事はない。

初めての感覚……

「ん……は……つあ」

呼吸を忘れて、酸欠になりそうだ

「わわわ……や……！」

ふと、俺に重なる祐也の向こう側の姿見が視界に入る

そこに映る自分の姿

必死に祐也にしがみつき、混乱した自分の姿

その中に、貪欲に彼を欲する自分が映し出されたよつで……

(や……べつー)

「祐也！祐也！」

彼を引き剥がそつと、本氣で奴の胸元を拳で殴る。

「つて！」

その痛みでようやく祐也の腕の力が抜けた。

瞬間を見計らい、俺は腕から逃げる。

「いてえな」

「あつたりまえだ！いきなり…何すんだつ」

ズルズルと座り込む俺は、それでも負けないよう奴を睨み付ける
そうしなければ、迫力負けしてしまいそうで…

「おま…つ…まだ酔つてんのかよ」

整わない呼吸

上がる肩

「そんなんに欲求不満なら、彼女んとこ行きや良かつただろ？がつ

自分にまで、先ほどの香水が移つたよつで気持ち悪い

「……別に…そんなんじやねえよ」

「じゃあ、どうこうつもりだよつ

「さあな。今までの延長だろ」

そう言い放ち、祐也はバスルームへ消えた。

静寂が部屋に戻る

俺の荒い呼吸だけが、部屋に木靈した。

(マジ…かよ…)

俺はふと、目の前の鏡を見つめた。

髪もボサボサ。

今にも泣き出しそうな自分の姿に、情けなくなる。

しかも…

(勘弁してくれ…)

不覚にも、反応を示した下半身

(男の性だろ…)

一人で言い訳するだけ虚しくなる

無我夢中で受け止めたキス

姿見に映る自分が浅ましくて冷静になつた瞬間に… 反応してしまつた

(変態かよ…俺)

羞恥プレイなんて、ガラじやねえだろ…

ふうっと深いため息をつく。

バスルームから聞こえてくるシャワーの音に、俺は顔を上げた。

一体どんなつもりだったのか…

欲求不満になるほど女に不自由してるはずがない。

今夜だって、本当なら彼女のどこに泊まりだつたはずなんだから…。

彼女のどこに行かず、帰ると決めたのは本人だ。

なら何故？

(バレたかな?)

今まで隠していた恋心…

それが顔を出し、あいつを求めるような物欲しそうな顔をしていたのだろうか。

混乱した頭を冷静にしようとタバコに手を伸ばす。

しかし、切らしていたのを忘れていた。

こんな時に限つて買い置きもない。

コンビニに買いに行くのも面倒だ。

仕方が無く、祐也のタバコに手を伸ばした。

自分が無くなると時々貰う。

自分とは違う銘柄

祐也の方が重い。

少し苦みのある味で、よつやく一息ついた気分になつた。

「ハハ、風呂っこだ！」

俺がよつやく冷静になつた頃、祐也が何事も無かつたよつにバブルームから出てきた。

それもそうか…

『今までの延長だ』

奴はそう言つてた。

意識するやつなものでもない。

意味を問いただす必要もない。

ただの気紛れ…

高校の時も、気まぐれにキスした。

それと同じ事

考え込んでいる方が馬鹿らしい

こいつにとつて、キスなんて意味が無いんだ

「ん。入る。そだ、タバコ貰つたから」

「ああ。お前の切らしたの？」

「うん。買い置きし忘れた。明日貰つてくるわ」

そう言って、祐也の横をすり抜ける。

俺も何も無かつたかのように振舞うしかない

今はもう、イヤな香りは消えていた。

／＼＼＼＼

翌朝…

「う…ん…」

俺は眩しく射す太陽の光で目が覚めた。

バイトがラストまでの翌日は、授業は昼から休みの日にしている。だから、体に疲れが残ることはあまりないのだが…

(頭…いてえ)

どうにも昨日（田村は越えていたから今日になるのか?）の出来事が頭から離れず

しまっては、思い出しては体が反応しそうになる。

(う…休みてえ…)

非現実的な事を思いながら、ベッドの中で寝返りをつつ。何度もそうしてみると…

「ミヤ…起きてるのか?」

ドアをノックする音と同時に祐也の声がした。

どうやら、彼は既に起きてるらしい。

今日も同じ毎過ぎかの授業。

早く起きた方が昼飯を作るルール。

あの様子だと既に昼飯は出来上がっているのだひつ。

(元気だな…)

いろいろ考えていた自分がいけないのだが祐也のその神経が羨まし

くなる。

いや、気がしてなきゃ何とも思わないのが普通なんだかひどいも...

「起きてる。今行く」

重い体を起りし、ドアに向かつて意表表示をしておへとベッドから降りた。

その瞬間、微かなめまいに襲われる。

(う……)

一瞬動きが止まる。
頭を押さえたまま、ジッとしていると程なくして収まった。

(疲れ……のかな……俺)

ふつりと思わずため息が出た。

もしかしたら限界なのだろうか…

自分の恋心を隠し、ひたすらに笑顔を作るのも…

一緒にいる空間はとても好きだ

好きな奴と一緒にられて、イヤな訳がない
しかし、向こうに相手がいるとき…

自然に振る舞うほど難しいものはないと思つ

この気持ちに気付かれるのは困るが、あまりに無神経だと腹が立つ。
矛盾した感情

それでも『別々に住もう』とも言えない
今の環境を手放す勇気すらない

(覚悟…したんだけどな)

俺は自分の頬をパチンと叩くと、リビングへ出た。

のひのひと部屋を出れば、リビングには良い香りが漂つていた。

「やつと起きてきたか」

ベランダでタバコを吸っていた祐也が俺に気付いて部屋に戻つてく
る。

テーブルにはパスタが湯気を立てていて、朝食を逃した腹が空腹を
訴えた。

「先食べて良かつたのに…」

「一服した後食べようと思つてたんだよ。そしたらお前が起きてき
た」

「あそ」

「顔洗つて来いよ」

「うん」

もそもそと洗面所へ移動する。

鏡に映る自分の顔は酷いものだった。
いかにも寝不足ですと言つた表情。
顔色が良いとも言えない。

(俺が女なら、今日は学校は休むな)

あまり自分の身なりで気にはしないが、正直人前に出たいと思つような状態ではない事は確かだつた。

しかし、それも諦める。

休む理由も無いし、祐也に勘ぐられるのも御免だ。

一通りの準備をし、リビングへ戻ると既にコーヒーも用意されてい
た。

「お、準備できてるな」

「お前が起きるの遅いんだよ」

呆れた色を含んだ声に、俺は苦笑いを溢す。

「…昨日はラストまでだつたし、忙しかつたの知つてるだろ?」

「うして軽い言い合にも出来るのは、自然に見えるだろ?」

裕也と向かい合いに座り、昼食を食べ始めた。

テレビでは毎のニュース。

天気予報なんかもやっているが、あまり耳に入らない。

「祐也、今日バイト何時まで？」

「ん？ 今日は6時から10時。晩飯、コンビニなんかで買ってくるよ」

「了解」

夕食が一緒になる時は、どちらかが作っていたりする。

食費節約のためもある。

しかし、ずれる時は一人分を作るのも億劫で、外食で済ませてしまうのだが。

今日はどうやら夕食は別々のようだ。

顔を合わせないことに、微かな安心を覚えた。

「食い終わったら行くぞ」

すでに食事を終えた祐也が立ち上がる。

「はーい」

俺も少し速度を上げて食事に専念することにした。

重い体を引きずりながら、それでも祐也と大学へ行った。
といつあえず出席だけはしておこう、と思つたから。

「ミヤちゃんー！」

連絡用の掲示板で休講などの確認をしていると、こきなり聞き慣れない呼び名で呼ばれた。

俺をミヤと呼ぶのは祐也だけで、まして『ちゃん』付けで呼ばれたことなんてない。

「…誰だ？」

身体のダルさから声が不機嫌にはなるが、それでも返事をする。当然隣にいた祐也も声のする方へ振り返った。

「ミヤちゃん、毎過ぎからなんだ？」

そう言つて、手を振つてるのは、確か昨日、祐也たちの飲み会にいた：

「”真明”くん？」

ほとんど印象に残つてなかつたが、からうじて記憶を辿る。とは言つたものの、ちゃんと名前を名乗つたわけじゃないから仕方がない。

「あれ、名前知つてたんだ？」

彼は楽しそうに笑う。

「俺、山口真明。こここの英文科に通つてるんだ。鴨井に聞いてない？」

「いや……昨日の話はあんま……」

「や。シゲとは幼なじみなんだ。俺のが一つ上だけね」

「じゃあ三回生？」

「うん。よひしへ」

物腰柔らかな真明は、祐也とは逆の雰囲気がだが女受けが良さそつなく立ちをしていた。

身長も高い。

なんとなく落ち着いた風貌は、俺と一つしか違つとは思えなかつた。二つ・三つ違つてもおかしくはない氣もある。

そんな事をぼんやりと俺は思いながら、山口真明サンを見上げていた。

「鴨井、昨夜…美結ちゃん怒つてたぞ」

真明サンは俺の視線にはチラリと笑みを返し、祐也に話しかける。「宥めるの大変だつたんだからな。もう少し穩便にすませられないのかい？」

「…悪かつたな」

裕也は口ではそう言つが…

きつと悪いなんて思つてない。

長い付き合いで分かる。

後に残された人間が、ややこじりとを背負つだけなのだ。

「フオローしておけよ？」

真明サンはそう言つが、祐也の反応はイマイチ。

面倒だとでも思つてゐるのだつ。

その空氣を真明サンは感じ取つたらしく。

「じゃあ、そういう事だから。//ヤちゃん、またね
彼は祐也の態度を深く言及するわけでもなく、爽やかに去つていつた。

…しかし…どうにかならないものか…

俺は思わず深いため息をついた。

隣の祐也からの不機嫌オーラが痛い。

自業自得だつてのに…

真明サンに感謝こそしても、ここはヤツがキレる場ではない。

「祐也、真明…さんの言つとおり、フォローしておけよ?」

一応諒めてみる。

「いらねえよ

あつたり切り捨てられる

「あのなあ…彼女に振られるぞ」
「別に。どうでもいい」

まだ…

執着が無いのは構わないが、いつやって誠意すら見せないのはどうなんだ。

「これいじめ起じやう、よくじこまできたものだと知つ。いつか、殺傷事件でも起きるんぢやないのか？」

「つたく…祐也、少しば大人になれよ? いつか、本気で誰かを好きになつた時に困るのはお前だからな」

「そう…だな」

一瞬…祐也の瞳が淋しそうに伏せられる。

(……?)

それは見間違えかと思ひませう一瞬だった。

次に見たときは、いつもの祐也で…

「授業、行くぞ」

そう言って教室に行つてしまつた。

ぼんやりした頭で見た、一瞬の幻か…

長く一緒にいても、分からぬこともある。

例えば、彼の中に起きている変化とか

例えば、自分の周囲を取り巻く人間関係とか

常に同じ事などなくて

ともすれば、きっと見逃してしまつような些細な変化が、もしかしたら祐也の中にあるのかもしない

ふと、祐也との距離を感じて俺は涙腺が緩みそうになつた。

照明を落とした部屋に、静かにラジオから流れれる音楽

(誰の曲だつたっけかな)

有名なラブソング、…。

だけど、曲名は思い出せない。

それでも耳に心地良い…。

俺は何本目かのタバコに火をつけた。

授業が終わり、祐也はそのままバイトに行つた。

いつもなら、シゲあたりと遊んで帰る俺も今日はまつすぐ部屋に戻つた。

体のだるさは相変わらず…。

風邪かとも思つて熱を計つたが、至つて平熱。

しかし、食事をする気になれず買い置きのビールとコンビニのパンを一口食べただけで後はずつとぼんやりと座り込んでいた

テレビも鬱陶しく、ラジオで静寂をやり過ぐす。

(たるいなあ…)

幸い、明日は休みだ。

祐也が何かしらＤＶＤを借りててくれるだろ？から、それ見て過
ごせば良い。

一日、ぼーっと過ごしていたら、体も復活するだろ？

他人事のように考えていると、テーブルに置かれた携帯に着信を知
らせる音楽が鳴る。

(誰だ？)

携帯を見ると、見知らぬ携帯番号。

バイト先の誰かだろうか…？

「はい」

一応、ダルさを感じさせない声で反応する。

『もしもし？』

「どちらさん？」

『真明です』

名乗られた名前は予想もしなかった相手

「真明さん？」

『最初は”くん”付けが、今度は”さん”になつたんだ？』

楽しそうに話す声に、俺は気後れする。

「すいません…。まさか年上だと思わなかつたし…」
『いいよ。』さんもくすぐつたいから、呼び捨てにしてくれないかな?』

クスクスと小さく笑う声がする。

「はあ…。でも、なんで俺の携帯…」

『じめんね。シゲから聞いた。鴨井に用事だつたんだけど連絡つかなくてね。』やちゃんと連絡させてもらつたんだ』

なるほど…

あいつなら、携帯に出ないとかりえるもんな
妙に納得してしまつたが、さすがにそつは言えない。

「あー、あいつは今日バイトだから…」

無難な、でも真実を告げる。

『そつか。…うん、でも好都合かも…』

そう言られて、少しイヤな予感がした。

「…もしかして…美結ちゃん…何か言つてたんですか?」

祐也の彼女の話で聞かれたくない事なら、祐也はいない方が良い。

しかし、真明の口から予想と違つ言葉が出てきた。

『うん…。うなんだけど。好都合なのは』やちゃんと電話する口実
が出来たことかな』

『はい?…えつと…?』

思わず反応した声が微妙に裏返る。

受け答えが難しい事を言われた気がする…んだけど…?

「口実つて?」

『俺はね、ミヤちゃんとお近づきになりたいなあつて思つてゐるんだ』

「俺ど?」

益々意味が分からぬ

『わつ。ミヤちゃんといろいろ話してみたくてね』

「あの…俺、面白いネタとか持つてないないんですけど…シゲか祐
也が何か言いました?」

俺から聞きたい話なんて無いだろつし…

何が面白くて、俺と話したいのか…全く眞面目検討もつかない。

『わつこうんじやないんだけど…まあ、いいか』

う…。なんだか一人で納得されても困る

「あの…」

『あ、鴨井に伝言しておいたもらえるかな』

突然話題がすり替わる

なんだか肩透かしをくらつた気分

「なんでしょつ?」

『美結ちゃんがね、祐也と話したいから電話かメールよひしつつ』

「分かりました」

『うん、悪いけど伝えておいてね』

「うこうう伝言は高校の時からあつた

何故か俺が窓口になる

仕方がないと思つ。

向こうは必死だ。

自分の言葉を伝えるためには手段を選ばない。

おかげで巻き込まれる向こうは堪らない

「祐也に伝えるのはそれだけでいいんですか？」

『「うん。 とにかく、ニヤリヤんた。 今彼女とかいないんだって？」』

突然の話の切り替わりように、何も言葉が出てこない

なんだか、唐突な人だ…

「いない、ですけど」

『「ごめんね、いきなり。 この間シゲが言つてたからさ。 でも彼女い
ないんだつたら、気兼ねなく外出とか出来るよね？」』

「あ～…まあ…。 そうすね」

祐也と住んでいても、お互に自分のペースは崩さない。
だからこそ、祐也は女のところに行くのだろうし、自分も好きに遊
びに出かける。

『「じゃあさ、今度俺と出かけない？」』

「真明…と？」

『「や。 イヤ？」』

イヤかと聞かれても……

俺にしたら、知らない人間。
この間の飲み会に参加したわけでもないし、何か交流があつたわけ
でもない

何故、そんな相手と出かけるのか…
イヤも何も、単にどう返事すりやいいか困るだけだ。

「あの…出かけるつて？」
『行きたいとこ無い？車あるから遠出も出来るよ』
『いや…あのですね。シゲ達も誘つてつて事です…よね？』
どうにも話についていけない

『出来れば2人がいいかな。デートみたいだしね。ミヤちゃんの話
もゆっくり聞きたいし』

だから、何故2人なんだ…

全く意図がつかめない

だけど…

「別に…構わないんですけど……俺の話してもつまらないんじゃない？それに、この間の飲み会で誰か狙つてたんでしょう？その彼女誘えればいいんじゃないんですか？」

『だから//ヤナちゃんに興味があるんだよ

「……」

『//ヤナちゃんの事知りたいし、//ヤナちゃんの話も聞きたい。一田惚れだからね』

(はあ？)

一田惚れ？

今、一田惚れと言つたか？

『びっくりした？』
無言の俺に尋ねる声

びっくりした

びっくりしたけど…

「俺…男ですけど？」

『知ってるよ。女装は似合つてないだね。女の子には見えないよ』

今、やくつと変な事を言われたような気がするけれど…
それよりも…

「……一田惚れつて……」
『人を好きになるつて理屈じやないよね』

真明の言葉が胸に突き刺さる

なぜなら、俺もその感覚を知っているからだ
男とか女とか…
いつからとか、どうして好きなのかとか
理屈じやない

ただ…その人が好き

祐也が…好き

「…あの…」

『また連絡するよ。驚かせていいやんね。おやすみ』

「…はい」

電話が切れると、再び部屋が静かになる。

ラジオからの音楽はこの間にか一コースに変わっていた。

ズルズルとその場に座り込む。
昼間より体が重くなつた気がした。

無性に祐也に会いたくなる
恋しくなる

真明の言葉が…まるで自分の事を語つてこむよつて胸が痛い。

「…つ」

自然と頬に涙が伝づ

何がなんだか混乱していた。
どうすれば良いのか…
自分の気持ちの整理がつかない…

優しい真明の言葉にリンクする自分の気持ち
見えない祐也の心に、どうしようもないんだと納得させよつとする
自分がいて…

「……なんつ……なんだよつ」

誰に対してもなく毒を吐く

何かを言葉にしなければ、重くなつて行く気持だけに耐え切れなくなつてしまつた

その時、部屋の鍵が開く音がした。

(祐也……ー)

バイトが終わつたのだろう。

部屋の扉が開く。

「ミヤ?」

間接照明だけが照らす部屋に、祐也が呼びかける。

「ミヤ?……つて、お前……どうしたんだよー!」

まだ座り込んでる俺を見つけ、祐也は駆け寄つて來た。

「具合でも悪いのか?」

「あ?……ひせ?」

泣けば変に思われる

余計な心配をかける

分かつてはいても、流れる涙は止まつてはくれない

「わり……」

祐也から顔を逸らす。

泣いてるのはバレているが、それでも見られるのは気持ちが良いものではない。

「何があつたのか？」

心配そうに祐也は俺の前に屈む。俺の顔を覗き込もうとする祐也から、逃れたかった。

「… // ヤ？」

「『めん。ちよつと情緒不安定…』

なんとか心配かけまいとするが、祐也は俺の前からは去ってくれない。

それどころか…

「……具合も悪いんだろ？」

「え？」

「今朝、顔色悪かったしな

「…気付いてた？」

俺は思わず顔を上げた。

気付かれてないと思ったのに…
彼には気付かれていた…

「せりや、気付くだろ。何年の付き合いだと思つてんだ。でもそれだけじゃないんだろ？何があつた？」

「何も……」

「嘘つくなよ

「……」

時々、こつは何もかも見透かしてころんじやないかと思つてしまひ。

間接照明の薄暗い灯りの中、至近距離にいる祐也の表情は、この間見た時と同じ辛そうな…何かを堪える顔。

心配かけているのは俺なの」

不謹慎にも、その顔をキレイだと思つてしまつた。

灯りに透ける茶色の髪も、整つた田鼻立つも…

全部、俺のものだつたら良いの…

「……」

俺は無言のまま、祐也の頬に手を伸ばす。

そのまま顔にかかつた髪をかき上げる。サラリとした感触が気持ちよい。

「ミヤヘ」

「「めん。祐也」

俺は祐也から手を離し、自分の頭を搔き鳴った。
「何でも、ないんだ。さつきさ、真明から電話があつて…」
「真明から？何であいつがお前の携帯知ってるんだよ」
「シゲから聞いたんだって。お前に話したかったらしいんだけど、繫がらないって」

苦笑しながら祐也を見上げる。

「着信、気付かなかつたのか？」
「気付いたけど折り返さなかつただけ」
「あのな、折り返せよ。だから俺のところに電話頼むんだわ」
…本当に、周囲に無関心だな。

言葉に困れず、思つ。

「彼女に電話してやれよ。何か話あるんだってよ」
「…それが伝言か？」
「そう。俺が窓口になつてやつたんだよ」
「それだけで…お前にんなになつてんのかよ」

今度は祐也の手が俺の頬に触れる。

やがてやく止まつた涙の跡をなぞるよつて指を這わす。

「それだけじゃないだろ？あいつに何言われたんだよ」
「問いただす祐也の口調に、わずかに怒氣が含まれているのがのせの気がする

いだらうか。

頬に触れられた手は、そのままに…

ただ、祐也の視線だけが鋭くなる。

いつもなら納得して引き下がるのに、今田は何か様子がおかしい。

一九八九

有無を言わさない。

卷之三

「…………真明に……一緒に出かけようつて言われた」

（何を正直に話しているんだろう）

詳しく話すような内容じゃない。

けれど、今の祐也には話さなければいけない気がして……

俺に興味があるって。——思はれだつてさ。

： なんだって？

一層険しくなる表情

そこから、ひだりの左側

女付き合いが派手なこいつにしたら、男が男に恋愛するなんて想像できないのかもしれない

けれど、それは俺の気持ちを拒絶したのと同じ事…

だから自分で予防線を張る

「笑つちゅうよな…。俺、女に見えないんだぜ?なのに…惚れたなんてさ。しかもどこのが良いくんだかわつぱりだよ。第一印象だつて良いとは思わないし…」

「……」

「だから…ちゅつと混乱しちゃつただけ。少し体調も良くなかったしちゃ…。それで情緒不安定になつただけだから…。ほんつと、心配する必要ないんだ」

「……」

(だから…もひ、そんなに心配やうな顔するなよ)

俺は祐也の顔を見たくないで、少しづつ俯く。

しかし、祐也の手がそれを許さなかつた。

頬に添えられていた手は、俺の顎にかかり顔を持ち上げられる。

「…………もひ…や?」

祐也と田が会ひ。

その田に俺は恐怖を覚えた。

「もひ…や?」

「ふわけんなよ?」

「…………え?」

聞いたこともない程、低い声。

明らかに怒りの感情を露にした瞳。

「ふざけんなって言つたんだ。何が一緒に出かけよつだ。一田ぼれだと? ムカつくんだよ。何なんだよ、それ」

「祐也?」

「こいつが何に対しても何とか分からずただ困惑だけ。」

「断つたんだろうな? ミヤ?」

「…え?」

「その誘いだよ。断つたんだろうな?」

「いや…その…なんだか俺…混乱しちゃって…でも…OKは…した」

まさか、その時は告白されるとは思わなかつたから。ただ、友人として遊びに行くだけかと思っていた。

しかし、その瞬間、俺は祐也に襟首を締め上げられた。

「…つ…つ…ゆつ…やつ…ちよつ」

「お前もあいつの事好きなのかよ。だからOKしたのか?」

「…やつ…やがつ…待て…よ、祐也」

苦じくて上手く喋れない

「何が違うんだよ。好きだつて言われて…一人で出かける約束して…何が違うんだか言つてみろよ」

祐也の手に、力が籠る。

「それとも、欲求不満か? 男でも良いつて…あいつに優しく言われたから、それでも良いつてことか?」

「

「……ひがつって離せ……よ」

俺は首元にある祐也の手を掴み、そして力いっぱい引き剥がした。

「げほつ……つつ……つてえな……」

よつやく酸素が入り込む感じに、俺は肩で呼吸する。
しかし、祐也にはそんな事はどうでもいいらしい。

「ミヤ、どういうつもりか言えよ」

「どうこうして……どうもしねえよ。OKしたのは告られた前だ。ダ
チと出かけるのに、断る理由なんかねえだろー。」

「じゃあ、告られた後だったらどうなんだよ」

俺の反論に、よつやく冷静に人の話を聞く気になつたらしい。

「告られた後の誘いなら断つたよ。お前みたいに、好きだつて言わ
れて誰彼付き合つ気はないからな」

「じゃあ、きつちりと断わつておけよ?」

「…そのつもりだよ。大体なんだよ。…お前がそんなに怒り狂つこ
とじやねえだろ」

今度は俺がにらみつける。

祐也の鋭い眼光に負けそうになるから…

「お前だつて、あちこち遊び歩いてるじゃねえか。何が違うんだよ
「バカか、お前は。いい加減、俺だつて限界なんだよ」

「…バカつて…あのなつ。何が限界だよ。俺が殺されかけた理由に
なんのかよ」

今まで見たことない程、冷静さを欠いた祐也。

一体なのがそれ程までにこいつを駆り立てたのか検討もつかない。

「四年間、キスだけなんて、俺もなかなか純情だらつてことだよ」
そう言って、今度は祐也が脱力したように座り込み、なんとも情けないような…全く違う顔を見せる。

「は？ 純情？」

「いい加減気付よ？ 戯れに四年間キスだけしてたと本氣で思うか？ 下心くらいいあるぞ」

祐也の視線が柔らかくなる。

「そろそろ限界だ。いつまでもキスだけで満足出来る男じゃないからな」

少し自嘲気味に笑う祐也を俺は見たことがない。

「一体……こいつは何を言つてるんだ？」

四年間キスだけの関係つて…

それ……

「俺とのこと…言つてるのか？」

間抜けだと、自分でも思つ。

それでも、俺の自惚れかもしれない不安がある。

「お前は俺に四年間付き合いが続いてる人間を他に知ってるのか?」
からかうような口調に、何かを吹っ切れた感じを受け取る。
俺は思わず首を横に振った。

大概、女と別れると何か言つてきたり、家にいるよつになる。
新しく彼女が出来ると朝帰りが多くなつたりする。

なんとも分かりやすい行動なので、祐也の付き合つてている期間は大
体把握していた。

四年間…付き合いが続いている彼女なんて聞いたことは無い。

「なあ、ミヤ…そろそろ良いだろ?」

「な…にが?」

「キスの意味…はつきりさせよつせ」

そう言つて、祐也は俺に口付ける

いつものよつに軽く…

しかし、それは何度も降つてくる

額に…頬に…瞼に…

「ハ…お前はどうなんだよ」

「俺は……」

”はつきつさせよう”

それは、俺の気持ちを言つても大丈夫なのだろうか

伝えて、それでもなお……」こつは隣にいてくれるだらうか

不安が無いわけではない……

でも、俺もはつきつさせたいのは本音。

何か答えが見つかるのなら……

たとえ……別れでも……

「俺は、四年間……気持ちのないキスをするような人間じゃない」

「ミヤ……」

「俺だつて男だよ。下心くらうある

祐也の言葉を借りて言つ。

そして、今度は俺から祐也に口付けた。

よもや、俺からキスされるなんて思つてなかつたんだらう。呆然とする祐也に、思わず笑いがこみ上げた。

「びつくつしそぎだろ、祐也

「おまつ…そりゃ、びっくりするだろ？が！」

笑われたのが恥ずかしかったのか、祐也は薄暗い中でも赤くなっているのが分かる。

だけど、これで分かつた。

祐也は「」の先も一緒にいてくれる

きっと俺たちの気持ちは同じだったんだ

「ミヤー…」今まで笑つてんだよ」

「だつて…あ…おかしい…」

「あのな、笑うと「じやねえだろ」

呆れた声がするけど、笑いは止まらなかつた。

そりゃそうだろ？

今までどれだけ不安だつたか。

どれだけ自分の気持ちを押さえ込んでいたか…。

それが、受け入れられたつて分かつたらテンションもあがるだろ？

きっと、気が抜けたんだ。

安心したら、余計に笑いが止まらなくなる。

「ミヤー…おーまーえーなあ

「」ねん、「」めん」

ようやく笑いを抑えた俺は、ふうっと一息つく。

そして改めて祐也を見た。

「…祐也、ありがと」

「ん?なんだよ、いきなり」

「なんとなく、言いたくなつただけ」

「変なヤツ」

それだけ言うと祐也は立ち上がり、部屋の電気をつける。

床に放置された俺の携帯と、帰宅してそのままになつていた祐也のカバンをテーブルの上に上げ、俺の腕を掴むと立ち上がらせた。

「体調は?」

「少し…疲れただけ。明日休みだし」

「ならいいけどよ」

祐也は俺を椅子に座らせると、冷蔵庫からミネラルウォーターのボトルを出し、いつかへよこす。

「飲めよ」

「ん、サンキュー」

「おひ。それからミヤ、真明に明日口にでも断りの電話しておけよ」

「分かってるよ」

そこは念入りに呟つ。

なんとなく、嬉しい。

だけど、彼は更に嬉しい言葉をくれた

「後な…真明こ”ミヤちやん”って呼ばせるの止めさせり

「別にいいけど…なんでだよ?」

別に呼ばれる名なんて、何でも良い気がするのこ…

「ミヤって呼ぶのは俺だけにしておけ」

「え？」

「高校の時から……」これからもずっとだ。俺だけが呼ぶお前の名前だ

ろい？」

（なんだ…）

もうずっと……今は俺を特別視していたんだ…

それは気付かない程些細なものだけれど、きっとここに至っては大切な事。

「そつ、だな」

「俺も美結に明日電話するし」

「…珍しいな、お前が電話するの」

「まあな。だけどもう、”彼女”は必要ないからな」

祐也が笑って言う。

「たまには俺から別れ話だ」

「だな」

俺も一緒に微笑む。

今までと変わらない会話。

それでも、確かに違うものがそこにあった…

ひとまず落書きました。
ラスト1話で終了です。

次の日…

大学の食堂にて、ぼんやりと真明は座っていた。

「暗い顔してんなあー、真明」

ポンつと真明の頭を叩くのは、シゲ。

「なんだ、シゲか」

「なんだとは失礼だな。真明、フランクなんだって？」

「…誰から聞いたんだよ」

不機嫌な声で真明がシゲを見る。

いつもの柔らかな物腰はどうへやり…。

「俺は情報通なの。何でも知ってるんだよー」

「……なら、傷心の俺を少し静かに放つておくことはできないのか？」

「だから、傷心の幼馴染を慰めてやろうと食堂まで来たんじゃないの」

足を組んで座る真明の隣にシゲも座る。

「なあ、慰めてやろうか？」

「お前は俺の好みじゃない」

「…あのなあー、そういう意味の慰めじやなくってだな。今晚、食事作つてやるよ。お前のマンション行ってやるって」

シゲは頬杖ついて真明を見た。

地元にいた時から一人暮らしをしていて、料理方面は自信がある。同じ地元の真明も知っている事だから、時々食事を作つたりしていた。

「俺のリクエスト、聞いてくれるんだよな？」

真明が尋ねる。

「構わないけど、あんま面倒なのはかんべんな

そう言って、シゲはタバコに火をつけた。

「だーけどさ。雅はダメだと思ったよ。あいつ、祐也大好きだもんよ」

「知つてたなら教えるよ」

「教えてもアタックしたんだろう？」

「…多分」

真明も、シゲからタバコを貰い同じように火をつけた。

ゆらゆら揺れる煙に視線を流す。

「好み…だつたんだけどな」

咳けば、シゲが苦笑を洩らした。

「仕方ねえんじゃね？大体、祐也を敵に回すと怖いと思つよ？」

「鴨井は彼女いただろう」

「一応…ね。でも、あいつ…いつも彼女に興味もたないもんな。モテるくせに勿体無い！俺に分けるって言つんだつ」

「…お前はダメ。良い人で終わるタイプ」

真明にキッパリ言われ、シゲが凹む。

「もう少しオブラーートに包めば？」

「同じ事だらう? 大体、今はミヤ…田之上からの電話で俺の方が凹んでるの」

「何か言われた?」

「ん…。デートのお誘い断られたのと…ミヤツて名前で呼ぶなってさ」

「ふむ…雅のやつ、祐也に何か言られたのかね?」

シゲが腕を組む。

「さあ? はつきり言わないけどね。多分そうじやないかな。鴨井も田之上が好きなら、最初から捕まえておけばいいものを…」

フリーだと思えば、手に入れたくなる。

誰かのものだつたなら、気持ちも抑えられたのに

ただの負け惜しみだとしても、思わずにいられない

「しゃーねーよ。そういう二人なんだつて」

「ああ…今回の事で気付いたよ」

「まあ、新しい恋を見つけるつきやねえわな。また合コンする?」

「傷が癒えたらな~」

「見た目によらず、纖細」

シゲが楽しそうに話す。

それを見て、真明も口だけで笑った。

いつまでも…しきして傷ついているわけにはいかないから…

* * * * *

俺は、休みを祐也の借りてきたDVDを口長見て過ごした。

体調は不思議な程良かった。

やはり精神的なものだったのだろう。

ふと、流していたDVDから昨日聞いたラブソングが流れてきた

(あ、これ…映画の曲だったんだ)

タバコを吸う手が止まる。

映画から流れる曲に耳を傾ける。

英語の歌詞で意味はきちんと理解は出来ない。

けれど、昨日よりもずっと心地良い曲に聞こえるから不思議だ。

映画をそのままに、俺は自分の部屋に戻る。

そしてベッドを眺めた。

昨夜…

『部屋一緒にしようぜ? バイト代、今月結構入るからでかいベッド買えば一人で寝れるだろ?』

そう提案してきた祐也

最初は一緒に寝るなんて恥ずかしかったけれど…

これからはビレだけ一緒にいても時間が足りない。
別々の部屋で眠るなんて、淋しくなりそうだ。

（俺も、参つてゐるな…）

自嘲氣味に笑い、携帯を手にする。

『家具、見てくるから。授業終わったら連絡しし』

そう一言祐也に送信すると、俺は部屋を出た。

END

最終話（後書き）

終了です。長々読んでくださってありがとうございました。

今は懐かしい一番最初に書いたBしなので、思い出深いです。

後は18禁になるものと、友人から貰つたリクエストの話を後日談で書いてます。

またアップできたらと思つてます。

良かつたら感想などいただけたら嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8504/>

LOVE SICK

2010年10月19日23時42分発行